New Lifestyles and New Housing Trends

特集　新しい居住スタイル

Ⅱ 多様な住まい方と居住スタイル

地域居住 ― つながりの豊かさ　西村　一朗

里山の思想と新しい郊外生活　ケビン・ショート

「二住生活」のすすめ　松田　力

団塊世代以降のライフスタイルの変容と
　終の棲家のゆくえ　正保　正惠

大規模団地の現在と行方　大江　守之

セーフティネット論と住宅政策　檜谷　美恵子

住まいという親密圏の再構築にむけて　篠原　聡子

介護・家族・住まい　島村　八重子

住宅リフォーム市場の光と影　鈴木　隆

地域居住 つながりの豊かさ

西村　一朗
Written by Ichiro Nishimura

はじめに

社会状況の変化として「会社人間」から「居住地人間」へ、ということを、まずあげてみたい。いわゆる「団塊の世代」が六〇歳の定年を迎える来年度（二〇〇七年度）から、「会社人間」から「居住地人間」になる人々がどっと増えてくる。私自身も、昨年度、定年退職だった。たまたま再就職したが、「居住地人間」の気分でもある。私は一〇数年前の五〇歳頃から「居住地人間」という言葉を「会社人間」に対置してきた。「会社人間」というのは、会社、官庁、学校、病院等の「働き場」に時間的に縛られている人々という意味で、彼らは逆に居住地で過ごす時間が極めて少ないのである。これから高齢化がさらに進んでいくと、「居住地人間」が全体としても増えてくる。また、「会社人間」であっても、労働時間の短縮等によって、「居住地人間」要素も増えてくると考えられよう。

「会社人間」は、一般に居住地の様子がよく分からない人々である。私は、定年になって「会社人間」から「居住地人間」に「激突」すると大変なので、一〇年ほど前の五〇歳頃から「軟着陸」を狙って徐々に「会社人間」から「居住地人間」へ近づく努力を意識的にする必要がある、と言ってきた。本稿では、そういう人々も念頭におきながら、「地域居住」について、改めて「つながりの豊かさ」を求めていく視点の大切さや具体的事例を述べてみたい。

地域居住におけるつながりとは

地域居住におけるつながり、と言うと、まず「人間関係」における人々とのつながり、と思われるであろう。もちろん、それは含まれており、第一に念頭におくべきことであるのは間違いなかろう。住居内においては、その関係は家族関係となるが、地域居住においては、低層の戸建て住宅地では、まずは「向こう三軒両隣」となろう。これは、家の前に出ればすぐに分かるし、簡単に行くこともできる。中層以上の集合住宅地では、まず「上下二軒両隣」であろう。床・天井や壁をつうじて生活の影響がまず及ぶのがそうであるからである。ところで中層以上の集合住宅の場合、階段室型では、上下二軒は階段をつうじて日々顔を合わせうるが、隣の一軒は隣の階段まで行かねばならない。廊下型では両隣はすぐに行けるが、上下二軒は、廊下の端の階段を上がり降りし、さらに廊下を伝って行かねばならない。とにかく

中層以上の集合住宅地の地域人間関係は、意識的に構築しないといけないことが、これからも分かるであろう。これらの自分の家も入れての六軒とか五軒は、地域居住における「最小単位」と言ってもよい。ちょっと余談となるが、学生諸姉には、「君たち、引っ越したら少なくとも戸建て住宅地では向う三軒両隣か、アパート、マンションの集合住宅地なら上下二軒両隣に引っ越しそばを持って行くべし」と理由も説明して話している。

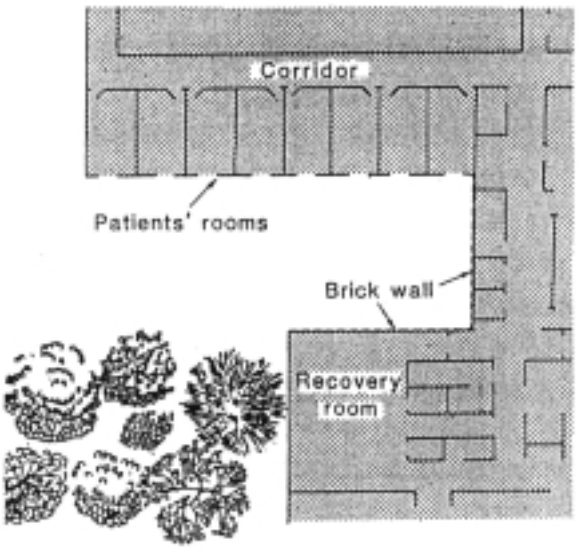


Fig. 1. Plan of the second floor of the study hospital showing the trees versus wall window views of patients. Data were also collected for patients assigned to third-floor rooms. One room on each floor was excluded because portions of both the trees and wall were visible from the windows. Architectural dimensions are not precisely to scale.

参考図（出典「Science」誌 1984年4月27日）

では、その次のくくりはどうなるだろうか。私は、これらの三～四倍の二〇軒前後ではないか、と考えている。これには、私が子ども時代、金沢のある町内で住んでいた経験も効いている。その時は、小路の片側が一〇軒であり、両側で二〇軒あったのである（途中、袋小路で二軒余分にあったが…）。その町内では、二〇軒の家族構成や家の中の様子も子ども心によく承知していたのである。これを中層の集合住宅に適用すると、例えば、階段室型なら五階建てで、二階段含む、では二〇軒となる。

では二〇軒前後の次は、その次は…となるのであるが、こういう居住地での住戸まとまり・つながりの段階構成については、それこそ定説があるわけではなく、大きなまとまりが「小学校区」で、近隣住区論でもそうなっている。先に下から積み上げて、次は、その次は…と言ったが、逆にこの「小学校区」から下に分節化していっても同じことである。この段階構成のあり方も「地域居住のつながりの問題」の一つに違いない。

それらの「人々・住戸とのつながり」だけが「つながり」というわけではなくて、私は他に「環境とのつながり」、そして「歴史とのつながり」をあげている。これらを最初に言い出したのは、今から一〇年ほど前のことで、次のように発言している。「…『つながり』とは、何かと言うと、第一に隣近所の住宅や人々とのつながり、第二に太陽光線、大地、空気、水、緑等の自然環境や道、集会所等の人工空間といった環境とのつながり、そして第三に自分史を含む時系列的歴史的つながりです。私は、これらを現存する住居から展開していって、まわりや歴史とのつながりを意識して、つまり地域人間関係とか地域環境とか、歴史的なつながりをもつ住居として研究し、意識的に『つながり』の豊かな住居、住環境を形成するように実践したらどうか、と思います…」（『住まいの研究誌』一三三頁、一九九六年一一月刊、これは住田昌二先生の大阪市大退職記念

誌)。このように発言せざるをえなかった背景は、プライバシーの極端な重視、人工的に環境条件を自由にコントロールすればよいといった極端な技術依存、そして過去の伝統を軽視する超近代主義等による住居や住環境の計画・デザイン傾向に対する危惧であった。

少し話が変わるが、かつて私は水俣病患者の住居改善に取り組み、ある患者宅の基本計画を立てたことがあった。もう三〇年以上前のことである。その水俣病患者が佐々木つた子さん(当時二六歳)で、彼女の住居に対する要望を聞き取った時、彼女は次のようなことを言った。「部屋から不知火海が見えるようにしてほしい。また、自分が小さい時に元気に遊び、お父さんたちが働いていた赤崎漁港も見たい。そして、道をとおる昔からの友達や近所のおばさんたちと話ができるようにしてほしい」と。私と共同設計者の山川元司さん(当時、京大建築学科院生)は、彼女の要望を満たすべく、二階に彼女の寝室や浴室・トイレを持っていくとともに、彼女の寝室にバルコニーを張り出して眺望を良くし、下の道もよく見えるようにした。残念ながら彼女は、この新居に一週間ほど入居して亡くなった。ところで、このつた子さんの要望を、後で反芻し分析してみると、私が後に提起した「三つのつながり」の重視に見事に合致していることが分かった。すなわち、近所の友達やおばさんたちと話を交わすのは「人々とのつながり」であり、不知火海が見えるのは「環境とのつながり」であり、そして赤崎漁港が見えるのは「自分史、歴史とのつながり」である。ほとんど一室に居たきりの彼女であったからこそ、一ヵ所でできる本質的要求が出せたのではなかろうか。

環境(特に自然環境)とのつながりの追求

ここでいう環境とは、第一に私たちを取り巻く施設等の人工環境、第二に水や緑や動物等の自然環境である。施設と施設との、つまり人工環境同士のつながりの問題も興味深いものがあるが、ここでは住居や施設と自然環境とのつながりについて述べてみる。

住居や施設が建て詰まってくると、つまり人工環境ばかりになってくると、息が詰まってくるのは誰もが経験しているのではないか。少し旧聞になるが、『SCIENCE』誌の一九八四年四月二七日号(Vol.224・No.4647)にROGERS S. ULRICH氏が「View Through a Window May Influence Recovery From Surgery(窓からの眺望が手術からの回復に影響するかもしれない)」という論文を書いている。内容を簡単に要約すると、「胆嚢摘出手術をした患者のカルテを調べ、たまたま同じ病院に入院し、病室の並びの窓から一方の樹木の緑を見られる患者グループと、他方の煉瓦壁しか見られない患者グループとを比べると、手術後、緑を見られるグループは、より弱い鎮痛剤を要求し、退院までの日数が、より少なかった」という(参考図参照)。一口に言うと、窓から樹木の緑が見える場合、見えない場合より健康回復が早いのではないか、ということである。

私は、それを踏まえつつ「窓から地球環境史四六億年にわたって次々に地表に現れて人間の環境ともなった、太陽(光線)、大地、大海(川や池)、空気(風)、植物そして動物といった要素がバランスあるワンセットとなって眺められ感じられることが、人間の心と身体の安らぎになる」という仮説を持つにいたった。先に述べた要素には、簡単に人間がコントロールできないものも多い。そこでよく考えて、一応コントロール可能な緑の樹木があり、目に見えることが「バランスあるワンセット」の中心にならざるをえないという仮説的結論を持つことになった。何故なら、緑の樹木が元気にあるということは、その足元に豊かな大地や水、空に輝く太陽が必ずなければならず、そして、こずえを風(空気)が吹き渡り、虫や鳥も飛んでくるからである。さらに、それらの横に元気の良い子どもたちが遊んでいる姿があれば最高である。これが住居や施設(の中の人々)と外の自然環境、そして人々とのつながりである。

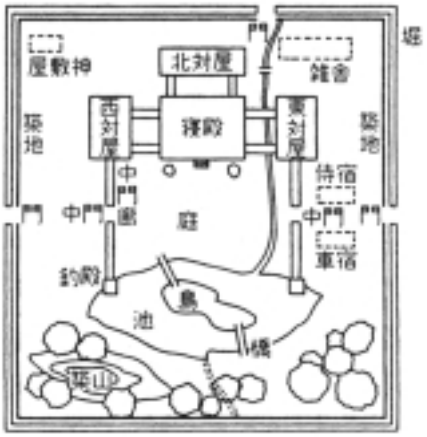
歴史とのつながりの重層的追求

人々とのつながり、環境とのつながりは、人間の成長とともに一定自然成長的に認識し確認することができる。赤ん坊から子ども、そして成人になるにつれて人々とのつながり、環境とのつながりも広域化し複雑になってくるが、経験として、それらのつながり具合が認識できるのである。ところが歴史とのつながりの認識は、意識的な学習によってしか獲得できない。同じ種や他の種とのつながり、生き延びていくべき環境とのつながりの認識は、人間以外の動物にあっても存在すると考えられるが、自分たちの過去とのつながりについては、人間だけが記憶や記録によって認識し、それらを現在や将来のあり方に活かしうるのである。

ところで歴史といっても、そのタイム・スパン（時間の幅）は様々だろう。長い方からいえば、宇宙史、地球環境史、生物史、動植物史、人類史、考古時代、古代史、中世史、近世史、近代史、現代史等である。自分のルーツも含めての自分史というのもあるだろう。私たちは、これら全ての歴史とつながっているのである。宇宙史まで遡ると、私たちの体をつくっている物質、原子レベルでのつながりにしかならないかもしれない。私たちは死ぬと焼かれて単なる物質に戻るのである。地球環境史のスパンになると、空気、海と大地の区別が始まり、雨が降り注いで真水と海水の違いが生じた。大地も火山噴火等でいろいろな性質を持った大地が生まれたが、それらの大地や海や川などは、現在の私たちの環境の元である。

生物史から言えば、生物が海に生まれたことで空気の組成が変わり、酸素が増えて海中や地表に生物の発展が始まり、（ダーウィンの進化論を信ずると）現在の私たちにつながっている。動植物史、人類史に入ってくると、「猿」の段階から徐々に人類に進化してきた。猿学者の河合雅夫さんは仮説として、人間が緑に囲まれて落ち着いた気分になれるのは、長い「猿時代」の森生活によるのではないか、と言っておられる。私も、その伝でいうと「手すりはすべからく木製にしたら

Uコート配置図



寝殿造り配置図

出典 ・Uコート：延藤安弘『集まってすむことは楽しいナ 住宅でまちをつくる』1987年12月 鹿島出版会
・寝殿造り：石堂正三郎・中根芳一『増補 新住居学概論』1984年2月 化学同人

どうか。猿時代からずっと握ってきて手の指も枝を握るのに適するようになってきた」と言っている。以下、古代史とのつながりで言うと「京都のコーポラティブ住宅Uコートは、現代寝殿造り型集合住宅ではないか」と私は言っている（拙著「生活環境のあり方について―一住環境学徒の視点から」（『家政学研究』二〇〇四年三月号、図参照）。

つながりを強める「匂い付け」

ここで、特に「環境とのつながり」を強める「匂い付け」について提起しておきたい。かつてNHKのTVの朝の番組で紹介していたが、ドイツでの事例として、子どもたちが両親の銀婚式に際して、プレゼントとして近所の公園に置くベンチを贈ったというのだ。こうすれば、彼らの「匂い」がベンチに付いて、いわば「引力」が働いて、両親や子どもたちはその公園によく散歩し、そのベンチに座るようになるだろう。小学校の卒業にあたって行う記念植樹も「匂い付け」であろう。スナックにボトルを置くのも「匂い付け」である。住宅地を計画し、建設し、上手く管理するには、様々な段階で様々なアイデアを駆使して住民自身の「匂い付け」を行っていけば、地域居住をいつまでも活気をもって保てるだろう。

共同行動によるつながりの追求
―コーポラティブ住宅の例―

昨年の四月から今年の四月まで、私はコーポラティブ住宅「つなね」管理組合の理事長をつとめた。この住宅地は二三軒という、私が人々とのつながりで提起した下から二つ目のまとまりである。阪神・淡路大震災後の一九九六年に計画がスタートし、四年後の二〇〇〇年三月二七日に居住開始し、現在七年目に入っている。計画、建設期間の四年間に参加住民に出入りがあったが、最終的に二三軒でスタートとなった。この過程で「人々とのつながり」は形成され、いろいろの議論で、植樹や雨水利用など「環境とのつながり」に留意し、居住地ネーミングに「つなね」という奈良らしい日本書紀にある名前を採用し、「歴史とのつながり」も意識したかたちになっている。こういうコーポラティブ住宅は、時間も労力もかかり、一般的ではないという声もあるが、他の供給方式においても各段階への住民参加によるコーポラティブ型「つながり」追求が、今後の豊かな地域居住になるのではなかろうか。 CEL

◎西村　一朗（にしむら・いちろう）
平安女学院大学生活環境学部教授・生活環境学部長、奈良女子大学名誉教授、工学博士。一九四一年金沢市生まれ。六六年京都大学大学院建築学専攻修士課程修了。豊田高専、京都大学を経て奈良女子大学家政学部助教授、生活環境学部教授を歴任。二〇〇五年三月定年退職し、同年四月より現職。著書に、『いい家みつけた―ロンドン借家住まい日誌―』（晶文社）、『キラッと輝くいい住まい―思い入れ住居論』（共著、彰国社）、『これからの郊外住宅地』（共著、せせらぎ出版）、『地域居住とまちづくり』（編著、せせらぎ出版）など。